

伝承遊び研究考(6)

——ことば遊び歌を中心に——

大 森 隆 子*

A Study of Traditional Games (6)
—Centering on Play Songs Without Gesture—

Takako ŌMORI

はじめに

第二次世界大戦後早々に生まれ、質素ではあるが自然や仲間遊びに恵まれた子ども時代を経て、高度経済成長政策の下、年を追って物質的豊かさを享受してきた筆者の世代にとって、現在の子どもたちを巡る状況については、特に精神的豊かさの面で問題を感じる日々である。

筆者は、これまで「かごめかごめ」、「花いちもんめ」といった定型のわらべうた遊び¹⁾や折り紙遊び²⁾など日本に古くから伝わる遊びについて、幼稚園や保育所における保育教材の視点からその特徴や価値、教育的効果の探索を研究テーマとしてきた。今回はことば遊び歌に焦点を当てて考察したい。正直なところ、伝承されたことば遊び歌事例には、教材としては適当でない〈はやし歌〉や〈悪口歌〉、〈まじない〉、〈占い〉などが相当数見受けられることから、それらを保育教材の対象として取り上げることへの躊躇があった。しかしながら、失われつつある伝承遊びの一分野として、その点も含めて検証することが現在及び将来の子どもたちに寄与するのではないかと思うに至った。

本稿においては、これまでと同様、資料として『日本わらべ歌全集26³⁾』を用いる。これは浅野建二・後藤正一・平井康三郎の監修、尾原昭夫・倉田正邦・高橋美智子・右田伊佐雄の編集によるもので、各巻はそれぞれの地域に通じた研究者たちによって著されている。編者の一人、浅野はその出版主旨と経緯・概要を以下のように記している。

言うまでもなく「わらべうた」は、私たちの遠い祖先が残してくれた貴重な文化遺産の一つであり、民族の声である。しかしこのままにしておけば、恐らく「わらべ歌」の正しい姿もゆがめられ、忘れられ、やがては亡びてゆくべき運命をもっているものと思う。このたび刊行した本全集は、全国各地のわらべ歌研究家、約五十余名の協力を結集して、主として明治期から昭和前期までの伝承わらべ歌について、北は北海道から南は沖縄まで、都道府県別に、歌詞・曲譜を克明に記録し、できるかぎり民

* 教育学部 子ども発達学科

俗伝承や遊び方などの解説を付したものである。すなわち全歌曲の歌詞や音楽的特性はもとより、時代差または地方差による変化に至るまで、細大もらさず網羅・分析・研究した成果の集大成で、現時点におけるわらべ歌研究の文献として、最大規模のものであるといっても過言ではない。(中略) また「わらべ歌」の根本資料として、幾らかでも純粋な形で次の世代の人たちへの良き贈物ともなれば望外の幸せである。⁴⁾

筆者はこの資料に掲載された全国各地のこたば遊び歌事例を基に、考察を行う。はじめに事例の集約を試み(1)、次に遊びの特徴を解明する(2)。その上で教育的な意義を探り(3)、まとめを行いたい(まとめに代えて)。

1 こたば遊び歌の集約

本全集において、こたば遊び歌を含むわらべ歌事例は、次のような項目のもとに分類したと述べられている。以下は東京編の凡例から引用したものだが、全巻共通である。

分類は「遊戯歌」「自然の歌」「動物植物の歌」「歳事歌」「こたば遊び歌」「子守歌」とし、それぞれを細分化した項目にしたがって歌詞317編、楽譜328編を収載した。⁵⁾

これによると、遊び(身体的動作)を伴う歌が最初で、後は歌詞の内容別・対象別に区分されている。こたば遊び歌は全体の5番目、最後の子守歌の一つ前に置かれている。東京編の目次構成と例数(カッコ内に示す)をみると、1遊びのはじめ(16)、2手まり歌(47)、3羽根つき歌(18)、4手遊び歌(50)、5鬼遊び歌(22)、6縄とび歌 ゴムとび歌(24)、7外遊び歌(29)、8自然の歌(11)、9動物植物の歌(28)、10歳事歌(15)、11こたば遊び歌(40)、12子守歌(17)となっており、編者の断りでは「遊戯歌」として一括されていた事例が遊びの内容別に7に区分され、それぞれが大項目化されている。この点に関する説明はないが、おそらく「遊戯歌」の例数の多さから、項目間のバランス上こうした設定を採用したものと思われる。この方法も全巻で踏襲されている。

それぞれの歌の収録数に関しては統一されておらず、各地域で異なる。上述の東京編の場合、遊戯歌全体が206で、自然の歌が11、動物植物の歌が28、歳事歌が15、こたば遊び歌が40、子守歌が17である。遊戯歌が約65%と大勢を占める中、こたば遊び歌は比較的多いことが分かる。

次にこたば遊び歌例の一つひとつをみていくと、それぞれに〈数え歌〉、〈尻取り歌〉、〈地口歌〉、〈なぞなぞ〉、〈まじない〉、〈約束〉、〈占い〉、〈からかい歌〉、〈遊びの中止〉、〈別れ〉といった種別名が付されている。ここからは、〈数え歌〉のように曲譜を伴う歌の範疇と見て取れるものと、〈まじない〉のように言葉を唱えるだけのように思われるものが混在していることが分かる。改めてこたば遊び歌の種類の広範さに気づかされる。

またそうした特質がもたらす結果として、他の領域に比べて「この系統の歌はおおむね唱え言に近く、これといった曲節は伴わない。したがって主として歌詞を紹介するにとどめる⁶⁾」といった発言もあるように、曲譜の面では全体に完成度が低いことを前提に、歌詞の方にもっぱら関心が向けられている。今回の筆者の論考においても、そうした点を考慮し、曲譜の検討は割愛して歌詞に重点を置いた。

『日本わらべ歌全集26』に掲載されているこたば遊びを都道府県別に種別ごとの例数を記し、一覧表を作成した。

伝承遊び研究考(6)

ことば遊び歌の地域別・種別分布表

種別 都道府県名	数え歌	尻取り歌	地口歌	からかい歌	ふざけ(悪戯)歌	はやし歌	悪口歌	民話の中の歌	替え歌	語り歌	唱え歌	約束	まじない	物選み	占い	願い(天気・幸せ)	けんか遊び歌	さからい歌	なぞなぞ	返事もじり	早口言葉	ことば遊び	遊びの中止	別れ	合計
北海道	1		1	2								1										1	2	8	
青森	1	1	3	12	5					4				2	1						1		1	31	
岩手		1	4	4			1					1			1									12	
秋田	1	1	3	2			3										2					1	1	14	
山形			3	7	1		1																1	13	
宮城	6		1	10								1	1									1	2	22	
福島				3									2		1								1	7	
栃木	1	1		4																				6	
群馬	2	2	9	9									5				2					1	3	33	
茨城			1	16								1		1									1	20	
千葉		2	1	8								1			6						1	1	2	22	
東京	1	2	5	12								1	6		4				1			2	6	40	
埼玉	2	2	8	13						2		1										1	2	34	
神奈川			2	9									1											12	
富山	6	2	1	2	4		1																	16	
新潟		3	4	5			1					1	2		2							1	3	22	
石川	2	1	1	3	1							1	5		1		1				2		3	21	
福井		2		7			4					2			1				2				2	20	
静岡	1		3	1								1			1								1	8	
山梨	1	2	2	6									2									1	1	15	
愛知	7	2	14	23									1											47	
長野	8																							8	
岐阜	2	2	3	2					1				3		2								1	16	
三重	2	1	4	2									1		1									11	
滋賀	2			3							1		4		1		2	1						14	
京都	2	2	5	14	4								2				3				4	7	2	45	
大阪	2	3	4	14									8					4			2			37	
奈良	2	1	2	5	2		3		1			2	2									1		21	
和歌山	3	1	7	10	4	2						1	1		2		2				1		2	36	
兵庫	1	2		10							2		1		2						1			19	
岡山	2	2		14								1	5		1							2	1	29	
広島	2	1	1	6																				10	
山口	2	1	4	18								1	7		2					2			1	38	
鳥取	3	1	2	9					2			1	2		2							2	1	26	
島根	3	3	3	11								1									1		1	23	
愛媛	3	1	3	3			3		2			1	2									1		19	
香川	2	2	4	7									5		1		2					2	1	26	
徳島	3	2	7	3								1			1							3		23	
高知	3	1	4	20	8							2	10								3			51	
福岡	4		2	6			3	2				1	4		3								1	26	
大分			2	11								2	2									2	1	21	
佐賀	2	2		1					1			1	1			1							1	10	
長崎	1			3	1										1									6	
熊本	2	5	1	5			5					3	2		2					1	1		3	30	
宮崎	1		8	4							2		4											20	
鹿児島		2	3	8	2								3										1	19	
沖縄			5	16	1											2	1	1						26	
合計	89	59	140	363	33	2	25	2	7	6	5	29	95	3	41	2	15	5	1	2	19	23	16	51	1033

総数は1033例である。最少は栃木・長崎両県の6、最多は高知県の51とばらつきが目立つが、各地域の担当者はいずれもその何倍もの収集例よりセレクトしている⁷⁾ことを考慮すると、もともと採集数の多寡に加えて選定者の主観によるところも大きいと思われる。

表中の種別名称は〈数え歌〉、〈尻取り歌〉、〈地口歌〉、〈からかい歌〉、〈ふざけ（いたずら）歌〉、〈はやし歌〉、〈悪口歌〉、〈民話の中の歌〉、〈替え歌〉、〈語り歌〉、〈唱え歌〉、〈約束〉、〈まじない〉、〈物選び〉、〈占い〉、〈願い（天気・幸せ）〉、〈けんか遊び歌〉、〈さからい歌〉、〈なぞなぞ〉、〈返事もじり〉、〈早口言葉〉、〈ことば遊び〉、〈遊びの中止〉、〈別れ〉の24である。この順番は編者による順序付けに従った。これらの種別項目を、筆者は遊びの性質と言葉と遊びの関係性の観点から3グループ化し、以下のようなグループ名を付した。

- 1 “はやし言葉歌”グループ——からかい歌 ふざけ（いたずら）歌 はやし歌
悪口歌 けんか遊び歌
- 2 “遊び言葉歌”グループ ——数え歌 尻取り歌 地口歌 民話の中の歌 替え歌
語り歌 唱え歌 さからい歌 なぞなぞ 返事もじり
早口言葉 ことば遊び
- 3 “目的別言葉歌”グループ——約束 まじない 物選び 占い 願い 遊びの中止
別れ

ことば遊び歌の地域別・種別分布表を基に遊びの事例を上述の3グループに振り分けた。その結果を多い順に挙げると、第1は“はやし言葉歌”のグループ（438例）で、種別数は5である、〈からかい歌〉・〈ふざけ（いたずら）歌〉・〈はやし歌〉・〈悪口歌〉・〈けんか遊び歌〉を含む。主として対人関係を基軸にことばの投げ掛けや掛け合いを楽しむものである。第2は“遊び言葉歌”のグループ（358例）で、種別数は12である。〈数え歌〉・〈尻取り歌〉・〈地口歌〉・〈民話の中の歌〉・〈替え歌〉・〈語り歌〉・〈唱え歌〉・〈さからい歌〉・〈なぞなぞ〉・〈返事もじり〉・〈早口言葉〉・〈ことば遊び〉を含む。いずれも言葉の抽象性・表象性に依拠して言葉そのものを遊びの対象として楽しむものである。第3は“目的別言葉歌”のグループ（237例）で、種別数は7である。〈約束〉・〈まじない〉・〈物選び〉・〈占い〉・〈願い（天気・幸せ）〉・〈遊びの中止〉・〈別れ〉を含む。それらは、現実的・直近的な目的や願望を叶えるために、言葉を利用しているものと考えられる。

並列的に紹介されている遊び例も、このような分類視点を導入することにより、遊び全体を構造的に把握することが可能となった。

2 ことば遊び歌の特徴

筆者によることば遊び歌の3分類化案を踏まえて、それらを順に検討する。まず、第1の“はやし言葉歌”グループを取り上げる。このグループに属する事例は、いずれも他者に対するからかいや悪口の掛け合いといった言葉群である。しかしながらこれらの子細に

見ていくと、うたう場面やうたい掛ける対象の違いにより、このグループの遊び歌が3ケースに分かれることに気づく。一つは異なる集落同士の争い、また学校間の喧嘩といった対立した集団間でうたい合うもの、二つは特定の子どもを標的にして皆ではやし立てる際にうたうもの、そして三つは特定の大人を子等がはやし立てる際にうたうものである。一つ目のケースは、集落ごとの結束が強く、他集落と喧嘩が絶えなかった時代性による。その場合取っ組み合いなどによる直接的方法というより、少し距離を取り、祭りの一つ「道祖神の時のどんどん小屋のこわし合い」やけんか歌「おめいの学校ぼろ学校 中にへえれば先生が いろはのいの字も読めねえで 黒板たたいて泣いていた⁸⁾」の応酬など、儀式的・間接的方法を取ったことが見て取れる。二つ目のケースでターゲットとなったのは、その集団もしくは掟から外れる行動を取る子に対してで、例えば男女交って遊んでいる子、知らない子、一人で遊ぶ子、集団のルールを破る子などである。また、気に障る性格的特徴（泣き虫・人まね・いじわる・甘えん坊・きかん坊・腹を立てる・おせっかい他）や、目に付く身体的特徴（眼鏡・絶壁頭・しもぶくれ・禿・あばた・太った他）が標的となったり、特段理由がない場合も多々あった。こうした歌の中には現在では禁止されている、身体的特徴によるもの、差別的なもの、卑猥なものが多く存在していた。ただし本書では極力排除されている。三つ目の対象となったのは、子どもにとって眩しい存在の者から、珍しい職業や様相を示す大人たちであった。具体的に挙げれば、殿様・お坊さん・医者・兵隊さん・船衆・炭焼き・花嫁・巡礼・西洋人などである。時には羨望心から、時には揶揄心から徒党を組んだ勢いを借りて投げ掛けたようである。

次に“遊び言葉歌”のグループを取り上げる。文字通り、言葉で遊ぶ、言葉の遊びなどの題材となる言葉群である。その時代を映すもの、また現在まで生命を保っているものなど、種々の言葉遊び歌例が多種類収集されているが、中でも〈地口歌〉、〈数え歌〉、〈尻取り歌〉の3つが大勢を占める。〈地口歌〉というのは詞句の語呂合わせを楽しむもので、全国的に普及している例としては、「そうだ村の村長さんは ソーダ飲んで死んだそうだ葬式饅頭でっかいそうだ 中のあんこがないそうだ⁹⁾」がある。数え歌の例としては、「一つとえーや 一重に咲いたる白椿（略）二つとえーや 二つちょうちょが働いて（略）三つとえーや みごとに咲いたる藤の花（以下略）¹⁰⁾」という美しい花づくしの歌や、「いっちゃんどこの にいちゃんが さんちゃんどこで しっこして ごめんも言わずに行っちゃった（以下略）¹¹⁾」という子どもらしいものまで多彩にある。〈尻取り歌〉の例としては、「さよなら三角 また来て四角 四角は豆腐 豆腐は白い 白いは兎 兎は跳ねる 跳ねるは蚤 蚤は赤い 赤いはほおずき ほおずきは鳴る¹²⁾」が各地でうたわれている。例数は少ないが、〈返事もじり〉の「蟻が十なら みみずが二十 蛙ア二十一 徴兵の検査¹³⁾」という歌は、「ありがとう」の返事をもじって返したもので、ユーモアにあふれている。

三つ目の“目的別言葉歌”のグループについて取り上げる。これは、言葉そのものを遊びの対象とするのではなく、他に目的があり、それを達成するために作られた・当てられた言葉群である。最も多い〈まじない〉の内訳には、「しびれ京へのぼれ¹⁴⁾」というしびれ止めや、「チチンプイプイ¹⁵⁾」という痛み止め、「ねずみの歯より はよ生えよ」という乳歯の抜けた後のまじないなどが全国に広がっている。この他蝮除け、煙除け、いぼ取り、眼病治しなど様々な〈まじない〉歌がある。〈占い〉では、「べろべろの神さま¹⁶⁾」と

いう尻をひった者の当てもの（木の枝の先を少し折り曲げ、回しながら唱える）が多く見受けられる。〈約束〉では「指切りげんまん うそついたら 針千本 飲ます¹⁷⁾」が一般的である。〈遊びの中止〉というのは、「いち抜けた にい抜けた さん抜けた しい抜けた¹⁸⁾」と言いつつ遊びを止めるもので、次に「おみやげみつつで たこみつつ おとっちゃんと おかつちゃんに やっとくれ¹⁹⁾」というような〈別れ〉の歌が家路に急がせる。

このように、ことば遊び歌事例について分類案を基に検討した結果、ことば遊び歌における言葉の特徴や役割をより構造的に捉えることができたように思う。

3 ことば遊び歌の教育的意義

ことば遊び歌事例に付してある編者の解説文を丹念に検証していくと、興味深い記述が見受けられる。それらの中から、教育的意義として認められる箇所を適宜抽出してみよう。まず、「いろはにこんぺいと こんぺいとはうまい うまいはお砂糖 お砂糖は白い（以下略）」という〈尻取り歌〉には、

尻取り歌は、子供たちにとって、なおざりにできない遊び道具である。階名唱反復（ドレミファソ・ドレミファソ）は子供の心に音階を定着させるが、尻取り遊びは語彙を定着させる。²⁰⁾

という解説があり、言葉の学習の中でも語彙の定着に資すると指摘している。

また、「猿が三匹通りよって いっちの中のこん猿が ようもの知っとして 日本国中歩いて（以下略）、太郎んぼ二郎んぼ どけえ馬あつねえだ ばんばん畑の 柿の木につねえだ（以下略）」という〈ことば遊び〉には、

この二曲は、歌とも物語ともつかないものだが、子供たちはよろこんで覚えた。自由で楽しい尻取り式の連想が、幼児に言葉の練習をさせ、イメージの拡がりを助けた。実用だけでない言葉の魅力を知ったことであろう。²¹⁾

との解釈が付され、限りなく物語に近い歌詞の暗唱が、語彙の獲得レベルから言葉や文を想像する力を鍛えるレベルに導くとする。

この他、明確なメッセージを託した歌詞の紹介もある。例えば、「一つとえ 竜門騒動は大騒動 二十まで作らした数え歌 うたおうかいな 二つとえ 普段の遺恨を無理として お江戸へ取られた又兵衛さん いとしやないか（以下略）」という〈数え歌〉は、その背景に竜門騒動（1818年）という土地の史実を子子孫孫に残そうとの明確な意思が介在した。歌のルーツは、

竜門騒動として名高い事件。（中略）百姓がきびしい年貢取り立てに反対して立ち上がった。この一揆を後世に伝えようと数え歌につくったと伝えられている。子供たちは手まり歌として、口ずさみとしてうたった。また子守歌としてもうたわれる。²²⁾とあり、楽しい内容でないにもかかわらず、数え歌や子守歌という遊び歌を通して200年近くも、継承されているのである。

これに似た例として、京都の「丸 竹 夷 二 押 御池 姉 三 六角（以下略）」という〈地口歌〉がある。その経緯は、

京の町は平安京の名残りをとどめ、東西と南北の通りが、碁盤の目のように整然と

区割りされている。両方の通りの名をいえば交差する地点がわかり、(中略)簡単に説明がつく。

その通りの名を覚えやすいように考えられたのが、「丸竹夷をはじめ、通りの名をうたい込んだ一連のわらべ歌である。いずれも子供たちが興味をもって覚えられように工夫されている。もともとわらべ歌は、遊びの中で知らず知らずのうちに覚えるものがほとんどだが、これらの歌は別であった。算数の“九九”を教わるときと同じように、折りにふれ大人たちも積極的に教えようとしたし、子供たちもいっしょうけんめい覚えようとした。子供たちが迷子にならないようにとねがう、親の愛情から生まれた家庭教育のわらべ歌といえよう。²³⁾

とあるように、子どもたちが迷子にならぬようにという親心のもと、京の地理を埋め込んだ歌である。いずれも大人たちの強い志・思いが伝承の根底にある。

最も多く継承されている種々の“はやし言葉歌”を通して、生きる知恵が透けて見えてくる。「新庄の子えらに なにくわしよ くちなわ(蛇)やって へどかけて いばらの簀で さぜこましょ(かきこむ)」という〈けんか歌〉については、

ガキ大将を先頭に両方が相対し、この歌をぶっつけあう。けんかのケリは、お互いがうたい疲れてしまい、「もう帰ろっ」ということになってアッケなく幕。そして子供たちはあくる日もまた、あきもせず始めるのである。²⁴⁾

と説明があるように、身体を傷つけることも、後にしこりを残すこともない歌合戦という平和的な方法を取っている。また茨城の「かっちゃん 数の子 にしんの子 煮ても焼いても 食べらんねえ」という〈からかい歌〉については、

子供たちにとっては、仲良くすることも、けんかをする 것도、悪口を言い合うことも、みんな遊びである。何もしない相手の悪口を言って、けんかの種を作って遊ぶこともある。こんなとき、即興的に、あとからあとから、歌が生まれてくる。

この歌は、名前の頭に「カ」の字がつく子に対してうたいあびせるが、どんな名前に対しても、子供たちは、当為即妙の詩人になる。²⁵⁾

と解説がある。同じく特定の子の名前からスタートする岡山の「かずちゃんいうても返事がねえ いい嫁さんでも取ったんか 煎餅1枚 くれてもええ」という〈からかい歌〉については、

名前を呼んでいるのに、すねたり、何か不満があつたりして、返事をしない子をからかってうたう。

子供たちは、ささいなことでけんかをしたり、また、すぐに仲直りをするものだ。

からかいではあるが、仲良くしようという気持ちを、ユーモラスに伝えている。²⁶⁾とある。いずれも、けんかやからかいの場面にうたわれるが、大事にしないようにとの知恵やユーモアが歌の言葉に込められている。また、そうした心配りを受け入れるべく双方間に心の柔軟性が形成されていたようだ。

この他、大阪の「お母んはよ もっといで 山でけんけん 鳴いといで おながへったら 嚙んもんで」という〈まじない〉については、

農作に出ている母親が夕方早く帰宅するようにと、くり返し唱える。空腹と寂しさで泣き出す小さな弟妹たちにも教え、いっしょにうたっていると、ふしぎに母親が早めに帰ってきたものだ、と伝承者はいう。²⁷⁾

とあり、高知の「どっちもこっちも はげになるよ お正月の晩に じくついて遊ば」という〈まじない〉は、「子供ふたりが、何かのひょうしに、おでこをぶつつけあったとき、ふたりで唱える²⁸⁾」とある。どちらも言葉が持つ魔力が子どもの寂しさや痛みを取り去る典型的例である。

以上、事例の解説文から教育的意義に結び付く箇所を押さえたところ、言葉や語彙の学習効果はもとより、それに伴う知力養成の効果、また対人関係の形成や調整力に関すること、さらに個々の子どもの人格安定・形成に関することなど、多様な側面で教育的働きが見て取れた。

まとめに代えて

明治から昭和の前期にかけて、わが国の子どもたちの間で継承されていたことば遊び歌の集約と検討を行った。相当数の事例が、この時期まで子どもたちの生活や遊びに根付いていたこと、そしてそれらは子どもたちの成長に多様な意義をもたらしていたことが明らかになった。

筆者が試みたことば遊び歌の3分類（1 “はやし言葉歌”，2 “遊び言葉歌”，3 “目的別言葉歌” の3型），すなわち，1 は主として対人関係を基軸にことばの投げ掛けや掛け合いを楽しむもの，2 は言葉の抽象性に依拠して言葉そのものを遊びの対象とするもの，3 は目的や願いを叶えるために言葉の力を利用するものに基づく検証を通して，ことば遊び歌の特徴の一端が解明された。またそれら子どもの世界の遊び歌が，言語本来の機能や使命と，さらにわが国の歴史や社会的背景と深く関わっていることが示唆された。例えば，集落対集落での歌の掛け合いは歌垣（「古代，男女が山や市などに集まって飲食や舞踊をしたり，掛け合いで歌を歌ったりして性的開放を行ったもの²⁹⁾」）が想起されるし，まじないの言葉には言霊（「古代，言葉にやどると信じられた霊力。発せられた言葉の内容どおりの状態を実現する力があると信じられていた³⁰⁾」）信仰が色濃く反映している。これらについては，民俗学・言語学等の知見を得て検証を深化させることが必要であろう。今後の課題としたい。

教育的意義の考察からは，長く伝承されてきたことば遊び歌の事例が現在の子どもたちにも通じる大切な教育的要素を備えていることを明らかにした。すなわち，言葉の楽しさや効用・力について。言葉は子どもたちの世界を広げ想像力を豊かにする。また，言葉のやり取りを通して対人関係力や自制心を育てる。何より長い年月伝えられてきたことば遊び歌には，子どもを思う先人たち・親たちの知恵や心，取り分け深い愛情が籠っている。そうした心理的・精神的果実が子どもたちの生命に安心感を与え，成長に寄与してきたといえるのではないか。

言葉を伝えるツールとしての曲譜の意味については，今回は触れることができなかった。機会を得て検討したいと考える。

一般に，伝承遊びは消滅の一途にあると言われて久しい。しかしながら，現在の子どもたちにもことば遊び歌は存外継承されているのではないか。そうした検討作業を基に，これからの子育てや保育場面でどのように位置づけ，またどのように活用していったらよいかの探求も今後の課題としたい。

注

- 1) 「保育のための“遊び”研究考(IV)——「かごめ」について——」(『豊橋短期大学研究紀要』第9号, 1992年所収), 「保育のための“遊び”研究考(IX)——再び「はないちもんめ」について(上)——」(同上, 第14号, 1997年所収), 「保育のための“遊び”研究考(X)——再び「はないちもんめ」について(中)——」(同上, 第15号, 1998年所収), 「保育のための“遊び”研究考(XI)——再び「はないちもんめ」について(下)——」(同上, 第16号, 1999年所収) 他。
- 2) 「遊戯折り紙研究考(1)——遊戯折り紙の起源について——」(『梶山女学園大学教育学部紀要』Vol. 2, 2009年所収), 「遊戯折り紙研究考(2)——遊戯折り紙の教育的価値について——」(同上, Vol. 3, 2010年所収), 「遊戯折り紙研究考(3)——遊戯折り紙の指導法について——」(同上, Vol. 4, 2011年所収), 「遊戯折り紙研究考(4)——わが国幼稚園創設期の折り紙教育について——」(同上, Vol. 5, 2012年所収)。
- 3) 浅野建二他監修『日本わらべ歌全集26』柳原書店, 1979年から順次刊行。
- 4) 松本達雄『日本わらべ歌全集1 北海道のわらべうた』柳原書店, 1985年, p. 2。
- 5) 梶原昭夫『日本わらべ歌全集7 東京のわらべ歌』柳原書店, 1979年, p. 3。
- 6) 同上, p. 281。
- 7) 例えば, 「宮崎編」のあとがきには「この本には, 手元にあるおよそ千二百曲(類似曲も含めて)の中から, 二百余曲を選んで収録してあるが」と記されている。(上村てる緒他『日本わらべ歌全集25 熊本 宮崎のわらべ歌』柳原書店, 1982年, p. 455)。
- 8) 酒井正保『日本わらべ歌全集5下 群馬のわらべ歌』柳原書店, 1987年, p. 178。
- 9) 尾原昭夫『日本わらべ歌全集6下 千葉のわらべ歌』柳原書店, 1981年, p. 198。
- 10) 服部勇次『日本わらべ歌全集12 愛知のわらべ歌』柳原書店, 1981年, p. 222。
- 11) 同上, p. 226。
- 12) 千葉瑞夫『日本わらべ歌全集2下 岩手のわらべ歌』柳原書店, 1985年, p. 186。
- 13) 小林輝治『日本わらべ歌全集10上 石川のわらべ歌』柳原書店, 1986年, p. 192。
- 14) 右田伊佐雄『日本わらべ歌全集16 大阪のわらべ歌』柳原書店, 1980年, p. 293。
- 15) 前掲『東京のわらべ歌』p. 292。
- 16) 中西包夫『日本わらべ歌全集17下 和歌山のわらべ歌』柳原書店, 1991年, p. 170。
- 17) 小野寺節子『日本わらべ歌全集8 埼玉 神奈川のわらべ歌』柳原書店, 1981年, p. 163。
- 18) 同上, p. 164。
- 19) 同上。
- 20) 久保けんお他『日本わらべ歌全集26 鹿児島 沖縄のわらべ歌』柳原書店, 1980年, p. 157。
- 21) 稲田和子 奥山勝太郎『日本わらべ歌全集18下 岡山のわらべ歌』柳原書店, 1985年, p. 176。
- 22) 服部勇次 東仁己『日本わらべ歌全集14下 三重のわらべ歌』柳原書店, 1992年, p. 179。
- 23) 高橋美智子『日本わらべ歌全集15 京都のわらべ歌』柳原書店, 1979年, p. 248。
- 24) 同上, p. 266。
- 25) 今瀬文也『日本わらべ歌全集6上 茨城のわらべ歌』柳原書店, 1991年, p. 158。
- 26) 前掲『岡山のわらべ歌』p. 188。
- 27) 前掲『大阪のわらべ歌』p. 296。
- 28) 園尾正夫他『日本わらべ歌全集22 徳島 高知のわらべ歌』柳原書店, 1981年, p. 272。
- 29) 林大監修『国語大辞典』小学館, 1986年, p. 199。
- 30) 同上, p. 852。